

# “The Boarding House” (*Dubliners*) における James Joyce のレトリック

－ <傷つけられた名誉への償い>に関する一考察－

梅 津 義 宣\*

James Joyce's Rhetoric in “The Boarding House” (*Dubliners*) ;  
An Analysis of “Reparation for Wounded Honor”

Yoshinobu Umetsu

Reparation for wounded honour is the motif of James Joyce's “The Boarding House.” In this story Bob Doran feels he must make both financial and spiritual reparation for the ethical fault with Polly, the daughter of Mrs. Mooney. Mrs. Mooney is an extremely calculating and determined woman. Like so many of Joyce's *Dubliners* Doran meekly yields to the threat of both Mrs. Mooney and Dublin gossip. He is obliged to suffer from nervous timidity and a curiously limited imagination. This is one of the typical symptoms of spiritual paralysis. The aim of this paper is to analyze the mutual relationship between the motif of “The Boarding House” and the rhetorical techniques by Joyce.

Key Words : convention, paralysis, reparation, rhetoric, wounded honor

## 1.

今日の形に落ち着くまでにさまざまな曲折や幾度もの推敲を必要とした James Joyce (1882 - 1941) の短篇集 *Dubliners* (1914 年出版) は、1904 年から 1907 年までに書かれたもので、15 篇の短篇から成り立っている。*Dubliners* はことごとくダブリンとダブリン市民を題材に取り上げながら、少年期 (最初の三篇)、思春期 (続く四篇)、成熟期 (続く四篇)、社会生活 (続く三篇)、そしてエピローグとしての “The Dead” と大きく四相に区分けしながら、ダブリンという小都市で生活を営む市民の社会、文化、宗教、愛欲の世界などの「精神的麻痺」(spiritual paralysis) の情況を描き出している。

*Dubliners* の第 7 番目の短篇として、1905 年 7 月 1 日、トリエステ (イタリア北東部の都市) で脱稿した “The Boarding House” は、自然主義的色彩が濃いこともあり、また他の 14 の短篇と比べてそれほど複雑なプロットの構成も用いられず、概ね「全体的に解りやすい」という批評・評価を得ている。この短篇は三人の主要な登場人物に焦点を当て、彼らのそれぞれの現在と過去を交錯させながら展開してゆく。作者 Joyce の視点は、下宿屋 (the boarding house) を営む女将 Mrs. Mooney から下宿人の Bob Doran へ、さらには女将の娘 Polly へと順に移っ

---

2010 年 4 月 10 日受理  
\* 尚綱学院大学 教授

てゆく。下宿屋の管理を一手に引き受ける豪腕の Mrs. Mooney の利己主義と打算に基づいた狡猾な策略。この母親の打算と駆け引きに唆されてさほど若くもない独身男 Bob Doran を誘惑する娘 Polly のしたたかさ。Polly は 19 歳、一見浮薄であるように見えるが、無邪気さと狡猾賢さが同居している。一方、Polly の罠にかかった下宿人 Bob Doran は権威や因習の圧力に弱く、常に世間の評判を気にする臆病で神経質な男である。それに彼は宗教や道徳に重きを置いて生活している。このような彼の資質と偏った価値観が下宿屋の母と娘の狡猾な術中に填まる原因となる。この物語は「Polly と Doran の色恋沙汰」「肉体関係」「性的な過ち」という明確な事実を端を発しているため、作品全体としての統制が崩れず、一定のまとまりを示している点が特徴と言える。Doran が Polly の挑発によって軽薄に肉体関係を結んだところ、まんまと Mrs. Mooney の計略にハマり、「結婚」を約束させられるという滑稽な結末が準備され、ある種の喜劇性をも感じさせる。ところで、「傷つけられた名誉」と言う時、《誰が、誰によって、どのように傷つけられたのか》が問題になる。同様に「傷つけられた名誉への償いとしての結婚」という観点も、双方の立場やこの時代特有の価値観、さらには社会的・経済的・宗教的状况に起因する世論の価値観等によっても微妙な差異となっており、やがてこのズレが事態を深刻な状況へと進展させる。なぜなら、事の端緒となったこの「私的なエロス」は単なる「個の概念」から、やがて、宗教的倫理観、経済、政治、婚姻事情、家（家庭・家族）、性意識、愛欲等の要因が錯綜し、やがて「公的エロス」という「ダブリン市民が普遍的にもつ概念・倫理観」へと転換し変貌し普遍化してゆくからである。このような「個別化・特殊化」から「普遍化」への概念の転換・推移は明らかに作者 Joyce の意図によるものである。……《エロス概念》における「個別化」の傾向と「普遍化」の傾向……この両者は横断的に混合しながらも、依然として、それぞれの境界線を厳しく明確化・種別化しようとする。とりわけ、この物語が書かれた時代（19世紀末～20世紀初頭）のダブリン（ひいてはアイルランド全体）に生きる人々の性や愛欲に関する意識や結婚に関わる状況について作者 Joyce の冷徹な視線が物語の各所に見受けられる。彼の観察はあたかもカメラのレンズを通したかのように精密ではあるが、単なるリアリズムではなく、時として象徴的もしくは暗示的表現を交えて巧みな文学的表現を展開してゆくこともある。ちょうど西洋の文学がリアリズムからシンボリズムへ、そして「意識の流れ」を旗幟とする新しい文学的潮流へと移行しようとしていた時代でもあり、「言語の実験」とか「レトリックと構成の合体」などという Joyce 独自の手法に基盤を置く芸術的概念と言えるだろう。Joyce の作品を考察してゆくとき、「言葉の芸術家・ジョイス」の名前にふさわしく、作品における《主題・構成・レトリック》の程好いコラボレーションを見出すこととなる。（因みに *Dubliners* は、1904 年以來 40 ほどの出版社にその出版・発行を断られながら、フランス自然派の堅実なリアリズムを採り、のち *The Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) においては、Samuel Butler (1612 - 1680) の *The Way of All Flesh* に倣い、かつ George Moore (1873 - 1958) の手法を取り入れて青年期の宗教的憧憬と性的欲求を克明に描くことになる。)

このように、本論文では、物語 “The Boarding House” の基盤を構築するモチーフである「精神的麻痺」について総合的な観点からその文学的特性についての考察を試みると同時に、この物語において「言葉の芸術家」とも言える作者 James Joyce が駆使した彼特有のレトリックについての考察を深めてゆきたいと思う。

まずは、この物語に潜伏する「傷つけられた名誉への償い」という概念の奥底にある登場人物たちの錯綜した内面を理解することがこの文学的考察の肝要な目的となる。この物語の三人

の主要な登場人物 (Mrs. Mooney, Polly, Bob Doran) のそれぞれの境遇や生い立ち、性格、社会的文化的素養、倫理観・価値観、生き方等について考察しながら、それらを基盤的に形成する当時のダブリン市民の内面にうごめく「精神的麻痺状態」「無気力」を炙り出すことが本論文の狙いとなる。— この時代は、ともすれば、階層秩序の大きな要因になっていたのは職業とともに宗教であり、そこには微妙な確執や意識の相違があった。英国国教会を中心とする支配者階級であるイギリス人、あるいはイギリス系アイルランド人が当時のダブリン (アイルランド) の上層部をほぼ独占し、土着の被支配者階級のカトリックは下層階級を支配していた。被支配者たちは支配者たちを「よそ者」と呼んで敵意を示し、イギリス人の多いベルファスト出身者に対して偏見をもった。さらに被支配者階級相互の間にも、また中流の同じレベルの者の間にも差異の意識があった。宗教、言語、財産、家はもちろん食べ物や趣味等ですら支配 (或いは被支配) 意識の指標となった。民族・宗教間の亀裂、貧富の格差、それに政治の問題が絡み合う。まさに、アイルランドの混迷と錯綜の時代である。

1845年から1849年にかけての「大飢饉」(the great Famine) を淵源とし、ローマ・カトリック教会や大英帝国による支配の下、当時のアイルランドでは種々の形の「構造的な歪み」が噴出する。人口は半減し、就職活動もままならず、結婚事情も最悪の状態であった。人々は生きる気力を殺がれ、それが当たり前のように感じてしまう。「麻痺状態」である。宗教観も倫理観も浮動する。その結果、当然のことながら性や愛欲に対する認識、ひいては結婚観も変貌する。また、経済の問題、特に貧困の問題は看過できない。貧困の問題は当時のアイルランドの結婚事情の問題とも密接な関わりをもち、深刻な社会情勢を生み出す要因となっていた。

## 2.

「やり手で支配的な妻」と「無能で酒乱の夫」という家族構成の図式は短篇集 *Dubliners* ではよく繰り返されるパターンである。

物語 “The Boarding House” の書き出しは、姿を見せることのない語り手によって Mrs. Mooney の過去と現在の情況が淡々と語られる。ここで読者は、彼女の肝のすわった鋭い判断力や堅実で巧妙な (下宿屋の) 経営管理ぶり、さらには親子間の駆け引きの様子等が語られる。Mrs. Mooney は「堂々たる大女」 (“a big imposing woman”) で、「断固とした態度をもつ女」 (“a determined woman”) であり、日頃、「女将」「女主人」 (“The Madam”) と呼ばれている。この呼び名は俗語では「売春宿の女将」の意味を暗示し<sup>1</sup>、この物語のモチーフやプロットに微妙な意味合いを賦与することになる。肉体をも提供するがその代償としての支払いは確実に取り立てる。彼女は、終始、万事を独りで切り盛りする才気活発な女性として描写される。……ところで、この物語の表題『下宿屋』の “The Boarding House” は、そもそも “bawdy-house” から由来するもので「売春宿」(a brothel) を意味するものである。<sup>2</sup> Joyce の長篇 *Finnegans Wake* の第 I 部の後半において短篇集 *Dubliners* を構成する各短篇の題名に触れて、“The Boarding House” は推敲が加えられた末 “The Boardelhouse” と修正されている。<sup>3</sup> 以上のことから、前述の Mrs. Mooney の「愛称」 “The Madam” と「売春宿の女将」と

<sup>1</sup> Gifford, Don. *Joyce Annotated*. Berkeley : University of California Press. 1959. p. 63.

<sup>2</sup> “bawdy-house” : a brothel (*The Oxford English Dictionary*)

<sup>3</sup> Joyce, James. *Finnegans Wake*. London : Faber & Faber Ltd. 1971. p. 186.

いう言外の意味が当然のように結び付く。(因みに“boardelhouse”は*The Oxford English Dictionary*にも見出すことができない。これは恐らくJoyce特有の造語であろう。)

Mrs. Mooney …… “moon” (「ぼんやり過ごす」「ふらふら彷徨う」) や “moony” (「夢を見ているような」「間の抜けた感じの」) 等の語感からは穏やかで柔らかい漂いと響きが伝わってくる。しかし、このMrs. Mooneyはそのような「ぼんやりと夢見るような様子」とは対極にある「断固たる姿勢を備えもった女性」「強靱な個性を有する女性」を想わせる人物である。また、「攻撃性」や「激しい闘争心」も彼女の個性である。さらに、何にもまして注目に値することは、夫人は娘Pollyを「価値のある商品」とみなし、終始、自らの商業主義・営利主義を支える手段と考えていることである。

Bob DoranとPollyの「問題」が浮かび上がり、Pollyの(司祭と夫人自身に対する)告解・告白によって問題の事実を確認するや否や、Mrs. Mooneyはこの二人の恋愛事件を道徳的問題として解決するために「世論」に頼ろうとする。語り手は、Mrs. Mooneyのことを「夫人は、倫理的問題を、まるで肉屋が肉切り包丁で切り裁くように処理してしまう」(She dealt with moral problems as a cleaver deals with meat. (p. 76))と語る。Mrs. Mooneyはもともと屠牛人の娘で、やがて肉屋の妻となって子どもをもうけるが、ある日酒乱の夫に肉切り包丁を振り回され襲われるという哀れな女性である。身の危険を感じた彼女は司祭に窮状を訴え、「夫婦別居の許可」を得る(カトリックでは「離婚」は許されないからである)。別居後の夫Mr. Mooneyは、みすぼらしい「執達吏」(a sheriff's man<sup>4</sup>)として無気力な日々をおくるはめになる。

肉屋の夫が肉切り包丁で屠牛人の娘である自分を切りつける。そして今度は、自分が倫理的問題を肉切り包丁で切り裁くように万事を手際よく処理する。……この一連の描写には、一見コミカルではあるが、巡り合わせの悪い結婚がもたらした不幸な末路への辛辣な皮肉が包含されるとともに、Mrs. Mooneyのこれまでの辛酸に満ちた宿命への復讐の決意も象徴的に映し出されている。……自分が置かれた惨めな状況を解決してくれる手立てを模索する。やがて「世論」こそ「娘を弄ばれた」哀れな母親(自分)を庇い味方してくれると確信する。彼女は、道徳、因習、習慣、儀礼等といったものが、全て、「世論」という都合の良い勝手な価値観と結びつき、Bob Doranを追い込む格好の攻撃的環境となって自分に味方してくれるものと信じ切る。この「世論という環境」は、自らを庇護する防衛としての役割を果たしてくれるとMrs. Mooneyは踏んでいる。

Mrs. Mooneyが意を決してBob Doranとの「闘いの場」へと向かう場面は次のように描写される。

- (1) It was a bright Sunday morning of early summer, promising heat, but with a fresh breeze blowing. All the windows of the boarding house were open and the lace curtains ballooned gently towards the street beneath the raised sashes. The belfry of George's Church sent out constant peals and worshippers, singly or in groups, traversed the little circus before the church, revealing their purpose by their self-contained demeanour no less than by the little volumes in their gloved hands.

(下線筆者) (p. 76.)

<sup>4</sup> “a sheriff's man”: an official employed to execute the sheriff's writs, to distraint arrest, etc. : Also *sheriff's officer*. (*The Oxford English Dictionary*)



さわやかな風が吹き、初夏の晴れた日曜日の朝…。のどかで平和な情景描写である。引用文(1)の最初の文には、頭韻などの繊細な音韻的手法が巧みに活かされ、読者は、心が弾むような清々しい漂いを感じさせられる。しかし、一見「平和な場面描写」に思われるこれらのパラグラフにも、物語全体のモチーフと構成に適った作者の細密な意図が感じられる。この場面は Mrs. Mooney にとって「闘いの場」なのである。作者は適切な箇所に重みのあるいくつかの語を配置して、挑戦者 Mrs. Mooney の気概を映し出している。例えば、彼女が Doran との「闘い」の日時を「日曜日の午前」に選んだのは、この日時が宗教的に重みのある事柄（ミサ・懺悔・告解など）を連想させ、Doran にある種の精神的・心理的圧迫感を与えるという巧妙な手法を講じているとも考えられる。また、“the belfry”（鐘楼）は、元来、中世時代に砦を包囲するときに使用された木製の（可動式の）櫓を意味した。戦争に必需の大道具である。“George’s Church” はプロテスタントの教会で、普通 “St. George’s Church” と呼ばれる。カトリック教徒の Mrs. Mooney は日頃ほとんど行かない教会である。伝説によれば George は馬上から竜を退治して王女を救ったといわれる守護聖人である。夫人はこの勇気ある英雄に加護を期待し祈願したとも読める。“the circus”（円形広場）は古代ローマの「円形競技場」に由来する。猛獣と人間との死闘、剣闘士同士による死闘、さらには生命を賭けた戦車競争等の残忍な闘いが繰り返された場所を想起させる。

このように、作者 Joyce の作為的なレトリックを感じさせる（場面設定の）手法によって、引用文(1)の冒頭の清涼な調子とは裏腹に、文章の進展とともに、Mrs. Mooney の「闘いの場」に向かう貪欲で攻撃的な姿勢が鮮明に描き出される。

- (2) There must be reparation made in such case. It is all very well for the man : he can go his ways as if nothing had happened, having had his moment of pleasure, but the girl has to bear the brunt. Some mothers would be content to patch up such an affair for a sum of money ; she had known cases of it. But she would not do so. For her only one reparation could make up for the loss of her daughter’s honour : marriage. (下線筆者) (p .77)

酒乱の夫 (Mr. Mooney) の暴力沙汰が原因で別居を余儀なくされ、独りで下宿屋を営み、生活の労苦を重ねながら、女手一つで育ててきた娘 Polly が、その若さと未熟さに付け込まれて、下宿人の 30 代半ばの独身男 Bob Doran に「傷物」にされた。幸い、相手は真面目な青年であり、カトリック系の大手ワイン商会の事務所で 13 年間も勤めてきている。相当の給料も得ており、貯えもあるらしい。ある程度身分も財政も安定した青年にとっては「この類の色恋沙汰」によって社会的地位も貯蓄も名誉も失いたくないのは明白である。しかし、このような青年の軽薄な認識こそ Mrs. Mooney が付け込む格好の標的・餌食となる。問題は、青年がどのような「償い」をするかである。世間の母親の中には、僅かな金銭で始末するものもいるが、「自分は絶対にそうはしない」と Mrs. Mooney は決断する。娘が傷つけられた「名誉」を回復するにはただ一つの「償い」しか存在しない。— すなわち、「結婚」である。— しかし、ここで夫人にとって重要なことは「結婚」という「言葉」であり、必要なものはその「証明書」なのである。つまり、「結婚」とは物質的、社会的権利を「世間」に提示する「証明書」にすぎないのである。Mrs. Mooney には、結婚を「神の特別な恩恵による秘跡 (sacramentum)」<sup>5</sup>と捉えるような宗

<sup>5</sup> 学校法人上智学院・新カトリック大辞典編集委員会編、『新カトリック大辞典』、研究社、1998、pp. 723-34.

教的認識は微塵も見られない。

「傷つけられた名誉に対する唯一の償いは結婚しかない」 — このように断固たる決断をした後、Mrs. Mooney は鏡の中の自らの姿を見詰め、映った顔の表情にある種の自己満足、同時に優越感を実感する。このダブリンには、娘を嫁がせることのできない母親たちが山ほどいるのだ…。確かに、当時の結婚難の現象は経済的な要因によることが顕著であり、ひいては、解雇・非雇用・就職難等とも連結する深刻な問題であった。これらの相互に連鎖する問題は1845年以降ほぼ一世紀におよぶ「大飢饉」(the great Famine)に起因する現象と言える。<sup>6</sup> 夥しい数の海外流出者や少子化現象等による国内人口の減少が顕著に見られ、それに内需産業の低迷や貿易の不活性化、さらには、解雇による失業者数の増加、未就職者数・非雇用者数の増大という悲惨な状況が相互的、総合的に連鎖した。結婚は、確実に、経済的状况に左右される、と当時のダブリンの人々は実感していた。

確かに、「傷つけられた名誉の償い」としての「結婚」に固執する Mrs. Mooney の姿勢を支えているのは、彼女の狡猾な打算に基づく利己主義であり、また、浮薄な娘 Polly の安定した結婚を願う母親としての一途な愛情と理解するのも一つの読み方であろう。しかし、このような彼女の内面を形成している要因として、この時代のダブリン (アイルランド) の「宗教と倫理観を膠着させて形成した禁欲主義を基盤とした性モラル」が考えられる。*Dubliners* が執筆された時代 (1904-1907) は、確かに、ピューリタン以上にピューリタンのカトリック教会が禁欲と性的抑圧を金科玉条とするような時代であった。(この傾向は、やがて、独立後のアイルランドが民族主義的色彩の濃厚な為政者たちとカトリック教会が結託して文学や映画等に対する厳しい検閲制度を設けた時代<sup>7</sup>と連鎖する。)

### 3.

物語の視点はここで Mrs. Mooney から Bob Doran に転換する。これまでの夫人の独白は主に「恋愛事件」に端を発する「傷つけられた娘の名誉の挽回のための闘い」であり、また、どの角度から検討しても自分が勝利できるという「確信」であった。

これとは対照的に、脆弱で臆病な Bob Doran にとっては、「自分が勝利する公算や手立て」等どうみても思いつくはずがない。Bob Doran の疲弊し憔悴しきった表情は次のように描き出される。

- (3) Mr. Doran was very anxious indeed this Sunday morning. He had made two attempts to shave but his hand had been so unsteady that he had been obliged to desist. Three days' reddish beard fringed his jaws and every two or three minutes a mist gathered on his glasses so that he had to take them off and polish them with his pocket-handkerchief. (下線筆者) (p. 78)

<sup>6</sup> Henke, Suzette & Unkeless, Elaine (ed.) *Women in Joyce*. Urbana, Chicago, London : University of Illinois Press. 1982. p. 33.

<sup>7</sup> O'Faolain, Susan. *The Irish*. Pelican Books. 1947 (1969 revised). / S. オフェイロン. 橋本横矩訳. 『アイルランド-歴史と風土』. 岩波書店. 1998. p. 316.

三日間も伸ばしっぱなしになっていた髭を剃ろうとするが、ひどく手が震えるので止めなければならぬ Bob Doran の状況が映し出される。場面は喜劇的ですからある。引用文中の下線部 “desist” (「止める」) は前のいくつかのパラグラフに描かれた Mrs. Mooney の「断固とした態度」を表す “determined” とは対照的である。(作者 Joyce は登場人物と言語を巧妙に連結させ状況描写をリアルに描き、読者の連想の網目を潤沢に広げている。)

Bob の脳裏に浮かぶぼんやりした不安感、後悔の念が彼を身動きのできない状態にしてしまっている。— “honour”、 “reputation”、 “marriage” — これら三つのキーワードは彼の頭の中で堂々巡りし、しかも空回りしているだけである。「世論」とか「世間体」という概念も Mrs. Mooney にとっては「闘いを保護してくれる環境」として「策略の武器」になるが、Bob Doran にとっては「凶器」となるだけで、卑屈と臆病の言い訳の場にしかならない。

Bob Doran の受難は、「因習」に縛られ、執拗にそれを固守しようとするダブリン市民特有の精神的貧困化に起因していることは事実であろう。しかし、われわれ読者・研究者は「この受難のより明白な根源は、Bob Doran 個人が有する優柔不断で小心翼翼たる無気力な性格自体に在る」と冷静に解釈する。下宿屋の母子の仕掛けた罠に「はめられた」のは確かな事実であり、その意味では「下宿屋は囲いの見えない檻のイメージであり、Mrs. Mooney はさしずめ捕獲者であった」<sup>8</sup> と言う指摘は蓋し的確であるとは言えるものの、この「致命的な麻痺状態」に陥らんとした Bob Doran に求められたのは、この母子の狡猾な罠や世論や権威や宗教等の圧力を跳ね返し凌駕する冷静な「思考力」・「判断力」と「勇気ある行動力 (節制・抑制能力も含めて)」であったことが鮮明に浮き彫りにされてくる。

#### 4.

この物語の冒頭の場面に戻ってみる。— ここには Mrs. Mooney の息子 Jack Mooney のことが短く描かれている (p. 74)。(Jack Mooney は Polly の兄である。) 世間は彼のことを「ならず者」とか「与太者」と呼んでいる。彼は兵士仲間の卑猥語を口にするのが大好きで、帰宅も深夜におよぶ。さらに、競馬と女芸人にかなりの関心をもっているとも描かれる。(彼は時折 Bob Doran にもある種の圧迫感を与え、怯えさせる。) 妹 Polly も、兄に似てか、さほど上品なほうではない。

日曜日の晩、きまって、表通りに面した女将 Mrs. Mooney の居間に下宿人が集まって親睦会が催された。この親睦会の席で Polly はよく歌った。彼女の歌う流行歌謡は、下記に記す歌詞の内容でも解かるように、かなり恣意的な象徴性を感じさせる類のものである。とりわけその歌詞の内容は読者に物語全体の展開を予測させる重要な意味合いをもつ。

即興の伴奏をしてもらって Polly はこんなふうに歌う。

“I’m a . . . naughty girl.  
You needn’t sham :  
You know I am”

(p. 74)

---

<sup>8</sup> Ryt, R. S. *A New Approach to Joyce*. Berkley & Los Angeles : University of California Press. 1982. p. 64.

この歌曲は“T'm a Naughty Girl”という当時流行ったミュージック・ホール曲である。歌の中の「わたし」は<語り手>の用いる“like a little perverse madonna” (p. 75) という比喩表現によって Polly の性格が浮き彫りにされる。ここでは<歌詞の中のわたし>がそのまま<歌い手の人格>と重複して読者の脳裏に刻み込まれることになる。すなわち、歌い手 Polly と歌詞の中の“T'm a naughty girl”のイメージが折り重なる。— “naughty”には“morally bad, wicked”という強烈な印象が付きまとう (*The Oxford English Dictionary*)。— 人前でこのような歌を平然と歌う19歳の小娘 Polly は「若い少女らしい純真無垢な性格」と「大人がもつ抜け目のなさ」を併せもつ若い娘であると理解することができる。このような性格の二重性は、その変幻自在な人格の発露のゆえに、かえって魅力的に映ることもあるのだろう。下宿屋の居間で開かれる親睦会には当然 Bob Doran もいたことを想えば、やがて彼女が下宿人 Bob Doran を挑発し自らの思いを遂げてゆくという筋書きもかなり自然な(理に適った)ものになる。— もちろんこの背後には女将 Mrs. Mooney の目が光っており、狡猾な罫が仕掛けられていることを読者は銘記しておかなければならない。「下宿屋」で彼女の世話になる若い男たちは、賄い付きの下宿代を週15シリング支払うことになっている(ただし、夕食時のビールやスタウトは別途徴収される)。金銭的な観点に的を絞ってみると、どうみても下宿人の男たちは「裕福」とはほど遠い、(どちらかと言えば)貧しい労働者の集まりである。その中で(少なくとも「女将」の目には)《目立った男》がいた。Bob Doran、その人である。— 彼は他の男たちと比べると「給料も結構なものらしいし、幾分ながら貯えももっている様子である」という経済的な理由だけで女将 Mrs. Mooney の目に留まり、彼女と娘 Polly の餌食となるのである。

しかし、このように母親に唆されて Bob Doran を官能的な罫を仕掛けて挑発し餌食とした Polly 自身が、今度は逆に、餌食となってしまう様子が描き出される。母親の偏狭な価値観に基づく結婚観。また、当時の宗教観、倫理観、道徳観等によって作り上げられた硬直した結婚観。さらには、それに連結する勝手な社会の風評・世間体。Bob Doran の気弱さ・臆病な気質も悩みの種である。Polly はこれらすべてに縛られ、成す術もなく、ただ呆然として、途方に暮れることになる。彼女の叫びには「自らの死」への願いを想わせるほどの悲痛な響きが込められている。

(4) 'O, Bob! O, Bob! What am I to do? What am I to do at all?'

She would put an end to herself, she said.

(p. 80)

「どうしたらいいの?」(“What am I to do?”)という Polly の言葉を Bob Doran は心の中で繰り返し、その意味(意図)するところをわが身に当てはめてみる。ここで、官能的快楽を追い求める独身者 Bob Doran の意志は、却って「思い止まれ!」と警告する。— 名誉にかけてもそのような「償い」の伴う罪過の道からは身を遠ざけたい!と彼は思う。



- (5) Her hopes and visions were so intricate that she no longer saw the white pillows on which her gaze was fixed or remembered that she was waiting for anything.

At last she heard her mother calling. She started to her feet and ran to the banisters.

‘Polly, Polly!’

‘Yes, mamma?’

‘Come down, dear. Mr. Doran wants to speak to you.

Then she remembered what she had been waiting for.

(p. 83)

上記引用文(5)は、物語“The Boarding House”の最後の場面の描写である。このパラグラフは全般にリズムカルな文章で書かれている。とりわけ最後の文の名詞節には紛れもない抑揚が感じられる。さらに、母親 Mrs. Mooney の呼びかけに対する娘 Polly の返事 ‘Yes, mamma’ はある種の「音符」のような役割を果たしている。(同じように *Dubliners* の他の物語、例えば “A Little Cloud” や “Clay”、でも呼びかけの言葉としての “mamma” は登場人物の性格描写や微妙な人間関係の暗示等に効果的に用いられ、時としてアイロニカルな響きをも伝えている。) 母親 Mrs. Mooney の呼びかけに答えるこの言葉 (“Yes, mamma”) は、母親と娘の間に心地よい意志の疎通があることを示唆するとともに、Polly 自身が <自己陶醉の境地> と <冷静な現況把握の心境> の間で落ち着いた平衡を保っていることを暗示している。同時に、結局は Mrs. Mooney の精緻で狡猾な打算どおりになったことをも暗示している。

この物語で読者は Bob Doran、Polly、Jack Mooney、さらには Mr. Doran に深刻な麻痺状態に縛られる姿を読むことになる。しかしながら、注目すべきことに、Mrs. Mooney だけは別である。彼女の邪悪な手口、狡猾な打算や利己主義は別として、この物語の全ての登場人物と比較した時、彼女は最も活気がある人物である。すなわち、停滞しきった麻痺状態を打破し、そこから脱出しようとする気概と意欲をもった人物と読み取ることができるからである。ただし、この活気ある意欲が自己愛や打算と結びついた時、その異様な力は波状的に増大し、周りとの調和を蝕み、ついには悲劇的な餌食を生み出すことになる。また Mrs. Mooney のこのような活力が単に彼女特有の生来の個性から来るものではなく、世間や社会の硬直した価値観に基づいた因習との闘いの結果身についたものであると捉えることが肝要であろう。

結局、読者・研究者は、当時のダブリン (アイルランド特有の) 社会的制約や社会からの要請がどのようにそれぞれの登場人物に影響を及ぼしているのかを明晰かつ冷厳な視線で見詰めてゆかなければ、この物語の真髄を理解したことにはならないと言えよう。作者 Joyce の視線は、読者が、単に、ダブリンの下層階級、中産階級における恋愛沙汰を扱った「巷の話」「陳腐なメロドラマ」という読み方をしてしまうことを回避するために周到な注意を払っている。(それは物語のモチーフの設定に止まらず構成やレトリックの巧みな駆使の仕方を丹念に研究すれば明白になる。) この物語のモチーフである《麻痺》という危機的状況が、単に「狭い地域」あるいは「数少ない人たち」の問題として限られてしまうのではなく、「全世界の全ての地域に住む全人類の普遍的課題である」という《ある種の警鐘》を鳴らしていることを読み取るべきである。

Bob Doran と Polly Mooney の結婚にいたるまでのいきさつを描いたこの物語 “The Boarding House” は、James Joyce の短篇集 *Dubliners* の「思春期」をあつかった4つの物語

の最後に位置し、Joyce 特有の《周到な卑俗さ》(scrupulous meanness) をもったレトリックの力を得て、次の「成熟期」の物語群へ導く媒体としての役割を見事に果している。

### 【使用テキスト】

Joyce, James. *Dubliners*. London : Grant Richard Ltd. Publishers. 1914.

### 【参考文献・引用文献】

- Beck, Warren. *James Joyce's Dubliners : Substance, Vision and Art*. Durham N. C. : Duke University Press. 1969.
- Brown, Richard. *James Joyce and Sexuality*. Cambridge : Cambridge University Press. 1985.
- Culleton, Clair A. *Names and Naming in Joyce*. Madison : The University of Wisconsin. 1994.
- Ellmann, Richard. *James Joyce* (New & Revised Edition). Oxford : Oxford University Press. 1982.
- Fogarty, Anne & Martin, Timothy. *Joyce on the Threshold*. Gainesville : University Press of Florida. 2005.
- Foster, John Wilson. *Irish Novels 1890 - 1940 : New Bearings in Culture and Fiction*. New York : Oxford University Press. 2008.
- Gifford, Don. *Joyce Annotated*. Berkley : University of California Press. 1982.
- Henke, Suzette A. & Unkeles, Elaine (ed.). *Women in Joyce*. Urbana, Chicago, London : University of Illinois Press. 1982.
- Herr, Cheryl. *Joyce's Anatomy of Culture*. Illinois : University of Illinois Press. 1996.
- Parrinder, Patrick. *James Joyce*. Cambridge : Cambridge University Press. 1984.
- Ryf, R. S. *A New Approach to Joyce*. Berkley & Los Angeles : University of California Press. 1982.
- Sultan, Stanley. *Eliot, Joyce and Company*. New York & Oxford : Oxford University Press. 1987.
- Tindall, William York. *A Reader's Guide to James Joyce*. New York : Noonday Press. 1959.
- 米本義孝. 『言葉の芸術家ジェイムズ・ジョイス』 東京 : 南雲堂. 2003.
- Wales, Katie. *The Language of James Joyce*. London : Macmillan Education Ltd. 1992.